

## 心地いい「異世界」

大西 淳子

女性ファッション誌「an・an」二〇二

一年六月二三日号に短歌が掲載された。短歌は詠む人と読む人がニアリーイコールであると考えられてきたが、読者層が確実に変化しているようだ。

この号の特集は「癒しの法則」。インテリアや薬膳料理、エッセイや漫画の他に「凝り固まった心を癒す言葉に出合える」として、短歌と詩を紹介している。

短歌は次の八冊より一首ずつ掲載。山階基『風にあたる』、高野公彦編『北原白秋歌集』、工藤玲音『水中で口笛』、佐藤弓生『世界が海におおわれるまで』、笹井宏之『てんとろり』、平岡直子『みじかい髪も長い髪も炎』、木下龍也『つむじ風、ここにありません』、穂村弘『シンジケート』。

心を整えるというテーマで選ばれた八冊。じっくり読んでみると「共感」と「異世界」というキーワードがあるように感じた。哀しみや嫉妬、怒り等、自分の感情と重なる歌に出合くと、言葉が寄り添ってくれるような気がする。また、思ってもみない展開で心を異

世界へ連れていってくれる歌に出合くと、現実から自由になれる気がする。

とうめいなかかとのかたちも天空も公孫樹の黄を踏んでみたくて

佐藤弓生『世界が海におおわれるまで』  
ふいに巨大なかかとが空に現れ、銀杏紅葉を踏んでいった。とてもスケールの大きな世界である。

今回、幻想的で独自の世界を描く佐藤弓生に注目し、その魅力を考えてみたい。同歌集から他の歌を引く。

あたらしい寝巻ひんやりひきだしの森林  
めいた時間を帯びて

ポロシャツの少年驟雨とともに駆けたち  
まじ斑の猟犬となる  
なんとという青空シャツも肉体も裏つかえ

しに乾いてみたい  
白の椅子プールサイドに残されて真冬す  
がしい骨となりゆく

一首目、抽斗の中に小さな森林がある。市街地より少し涼しい。その空気をまとった寝巻を取り出す。普段閉じられている抽斗の神

秘を温度で感じとっている。

二首目、降り出した雨に走る少年が、犬に変わる。「猟犬」に速さや勇ましさが見られており、斑の具体が空想を鮮明にする。

三首目、快晴の空にパリッと乾くシャツ。並んで肉体も裏返し乾いてみたいという着想は身体感覚を伴い秀逸である。

四首目、真冬のプールサイドの白い椅子は空虚である。しかし、無機質であるゆえ、痛ましさはなく「すがしい骨」となるという。実に発想が豊かだ。

いずれの歌も、現実と空想が地続きになっており、現実にはありえない展開でも、無理なく想像できる。佐藤の歌の魅力は、日常をベースに、絶妙な浮遊感を味わえるところではないか。多くの読者は、現実離れた奇想を期待しているわけではない。

佐藤は『モーヴ色のあめふる』のあとがき  
に、幻想はほんとうのことの種なしには  
生まれぬ、と書いている。

歌を現実から飛躍させるのは難しい。しかし、ありえないことを考え続けるより、ほんとうのことをじっくり見つめるほうが大切な  
のかもしれない。

心地いい「異世界」は、「現実世界」の数センチ先を表現することではないだろうか。